



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 日本語母語話者とドイツ語母語話者の日本語接触場面における「依頼の断り」の連鎖組織：「断り」発話の位置に注目して                     |
| Author(s)    | 市来，海唯                                                                       |
| Citation     | 日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 143-157                                            |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/95381">https://doi.org/10.18910/95381</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 日本語母語話者とドイツ語母語話者の日本語接触場面における 「依頼の断り」の連鎖組織

## —「断り」発話の位置に注目して—

市来 海唯

### 1. はじめに

会話の場面は、そこで使用されている言語がすべての会話参加者にとって母語である母語場面と、その言語の母語話者と非母語話者が同時に会話に参加している接触場面の二つに分けられる（ネウストプニー1981）。そして、武田（2006:13-14）で指摘されているように、接触場面には、会話参加者たちが互いに意図するポライトネスが「意図通りに作用しない、または全然意図していなかった言動が誤解される」危険性をはらんでいる。このような誤解ができるだけ生じないように、接触場面における実際のデータを使用した研究が今後も発展していくことが望まれる。

本稿では、接触場面の中でも、特に依頼に対する「断り」の言語行動に焦点を当てる。「断り」に関する研究は、これまで数多く分析が進められてきているが、依頼に対する「断り」と勧誘に対する「断り」を同じ言語行動として捉えているように見られる先行研究は少なくない（任 2004、尾崎 2006、吉井 2009）。『みんなの日本語初級』（スリーエーネットワーク:2013）をはじめとする日本語学習教材においても、勧誘とその断りを導入したあと、依頼の導入時には勧誘の断りと同表現で断ることができるとしている。しかしながら、依頼と勧誘の言語行動が全く別のものであることから、勧誘の断りと依頼の断りは根本的に異なるものであると考える。したがって、実際に依頼に対する断りに焦点をあて、その言語行動の相互行為上の特徴を明らかにする必要がある。

本稿では、日本語母語場面と接触場面における依頼の断りの会話では、核となる連鎖組織にそれぞれどのような特徴が見られるのかを明らかにすることを目的としている。その上で、二つの場面で異なる特徴が見られる場合、考えられる要因について考察する。本研究では、接触場面における日本語非母語話者にドイツ語が母語の日本語学習者を選んだ。それは、村田（2017:3）でも指摘されているように、ドイツ語を母語とする日本語学習者の日本語使用に関する研究が進んでいないからである。また、本稿では、ドイツ語母語話者同士の母語場面との区別を図るために、比較対象の母語場면을「日本語母語場面」と表現する。

### 2. 先行研究

「依頼に対する断り」とは、人が日常的に行う基本的言語行動であり、被依頼者は「どう断れば相手のメンツをつぶさずにうまく断ることができるか、その相手との従来の関係

を維持することができるのかなどに心を砕かなければならない」(堀江 1995:76)。施(2005)は、依頼の断りを対象に、日本人同士、台湾人同士で親しい同性の友人間の電話会話データの分析を行っている。分析の結果、日本人同士の依頼に対する断り談話において最初に用いられる構成要素は「理由説明」が圧倒的に多く、「引き受けられない」等の結論(施では「直接的断り」とされている)よりも、その理由を先に述べる傾向があるとしている。しかし、施では、断り談話の最初と最後に用いられる構成要素に焦点を当てて分析されており、構成要素の順序の分析までは行われていないため、「理由説明」だけで断っているのか、結論となる「直接的断り」がその後が続いているのか、あるいは依頼者は、被依頼者が「理由説明」を行っただけで「断りへの了解を示す発話」を行うのか、といったことは明らかにされていない。また、日本語母語話者とその他の言語の断りに関する対照研究は多くある(施 2005、元 2005 など)が、日本語母語話者と日本語学習者の接触場面における断りの研究は極めて少ない。また、言語社会・文化によって好まれる断りの形式が異なることは明らかにされている一方、日本語を母語としない学習者たちが接触場面において、どのように日本語を使用して断りを行うのかという具体的な会話のやりとりは十分明らかにされていない。

### 3. 研究方法

本研究では、依頼の断りの場面を対象に、日本語母語話者同士の日本語母語場面と日本語母語話者とドイツ語を母語とする日本語学習者の日本語接触場面を比較し、それぞれの相互行為上の特徴を見出すことを目的としている。会話を発話と発話の連鎖による相互行為と捉える会話分析の手法を用いることで、依頼を断る場面が、会話参加者たちのどのような発話のやりとりから形成されているのかを明らかにすることができると考える。一方で、自然会話から依頼とその断りの一定数のデータを収集するのは困難であるため、場面を統制できるロールプレイをデータ収集方法に選んだ。以下に、分析に用いる概念や、データ収集方法と分析方法の詳細について説明する。

#### 3.1 データ収集方法

調査協力者は、日本在住の日本語母語話者(JN)40名(男性19名、女性21名)と、留学を目的として日本に滞在しているドイツ語を母語とする日本語学習者(GN)8名(男性5名、女性3名)の計48名であり、いずれも10代から20代の大学生あるいは大学院生である。また、ある程度スムーズな会話の流れにおける言語的・非言語的やりとりを分析するため、互いの発話の意味理解に問題が生じてしまうことは望ましくないと考え、GNには中級以上の日本語能力を有している者に協力してもらった。

本研究では、ロールプレイ方式を用いて発話データを収集した。ロールプレイ方式を採用したのは、調査対象者を選定できることや分析対象の発話行為が実現する場面を設定で

きることなど、複数ある変数のコントロールができるからである。ロールプレイの場面設定は、負担度が高いと考えられる3つの労力的依頼に統一した<sup>1</sup>。それぞれの内容は、①卒業論文のためにインタビュー調査を依頼されるが、日程的に都合が合わない、②アルバイトのシフト交代を依頼されるが、その日は既に友人との予定が入ってしまっている、③英語のレポートの添削を依頼されるが、期日までにまとまった時間を確保できそうにない、の3場面である。それぞれの場面について、社会的地位が同等である者同士の設定とし、さらに親疎関係による断りの異同を調べるため、友人／知り合いという親疎の異なる2種類の会話を収集した。なお、ロールプレイの限界として、自然会話との違いが挙げられるが、より自然会話に近い状況にするために、被依頼者側のロールカードには、依頼されるという展開と依頼を断るという指示を示していない。そのため、断りが行われないデータもあった。本稿では、断りが達成されたデータのみを分析対象とする。

ロールプレイに際しては、親疎2種類の場面について、実際に親しい、あるいは親しくない相手とのペアを組んでもらった。日本語母語場面では、依頼者役(A)のJNが親疎それぞれ1名ずつに対して被依頼者役(B)のJN1名の組み合わせ、接触場面では、依頼者役(A)のJNが親疎1名ずつに対して、被依頼者役(B)GN1名の組み合わせである。参加者同士の性別が異なることによる会話への影響を考慮し、ロールプレイはすべて同性同士で行った。

調査の説明及びデータ収集については、調査者である筆者が協力者と同じ場所にいる場合と遠隔地にいる場合がある。遠隔地の場合にはオンラインでロールプレイの説明を行った。しかし、いずれの場合にも、協力者同士は同じ場所において、対面でロールプレイを行っている。調査者がロールプレイの場に同席している場合は、調査者のスマートフォンで音声を録音した。録音中、調査者は同じ部屋の離れたところにいた。調査者が同席していない場合には、協力者自身でスマートフォン等を使ってその場の音声を録音してもらい、終了後にデータを送ってもらった。協力者自身での録音を依頼したのは、ネット環境の不具合で音声途切れたり聞き取りづらくなるのを防ぐことも理由の一つである。録音中、調査者と協力者はオンラインで接続された状態だったが、対象者たちが会話をやめるまでは画面と音声をオフにしていた。今回、録画ではなく音声のみ収集したのは、遠隔地の協力者に対して録画をするよう依頼することが難しかったためである。しかし、音声データのみでも連鎖組織や言語形式の分析に大きな支障がでないと判断し、調査者同席の場合にも条件を揃え、音声のみ収集した。

本研究で扱う会話データの概要は、表1と表2の通りである。表中の会話参加者は、上段が被依頼者、下段が依頼者を示し、下段左側が「親」の関係、右側が「疎」の関係として行った協力者を表す。会話参加者のJNやGNと数字の間にあるFとMは、それぞれ女性、男性という意味である。データを取り上げる際には、データ名、親疎、ロールプレイの場面の順で、断片の名称として記載する(例: J01 親II)。

表1 日本語母語場面会話データ概要

| データ名 | 会話参加者 |       | データ名 | 会話参加者 |       |
|------|-------|-------|------|-------|-------|
| J01  | JNF01 |       | J05  | JNF13 |       |
|      | JNF02 | JNF03 |      | JNF14 | JNF15 |
| J02  | JNF04 |       | J06  | JNM16 |       |
|      | JNF05 | JNF06 |      | JNM17 | JNM18 |
| J03  | JNF07 |       | J07  | JNM19 |       |
|      | JNF08 | JNF09 |      | JNM20 | JNM21 |
| J04  | JNF10 |       | J08  | JNM22 |       |
|      | JNF11 | JNF12 |      | JNM23 | JNM24 |

表2 接触場面会話データ概要

| データ名 | 会話参加者                |       | データ名 | 会話参加者                 |       |
|------|----------------------|-------|------|-----------------------|-------|
| G01  | GNF01 初中級修了, 学習歴 2 年 |       | G05  | GNM05 初中級修了, 学習歴 4 年半 |       |
|      | JNF25                | JNF26 |      | JNM33                 | JNM34 |
| G02  | GNF02 初中級修了, 学習歴 5 年 |       | G06  | GNM06 N1 合格, 学習歴 2 年  |       |
|      | JNF27                | JNF28 |      | JNM35                 | JNM36 |
| G03  | GNM03 初中級修了, 学習歴 5 年 |       | G07  | GNF07 N2 合格, 学習歴 3 年  |       |
|      | JNM29                | JNM30 |      | JNF37                 | JNF38 |
| G04  | GNM04 N4 合格, 学習歴 6 年 |       | G08  | GNM08 N1 合格, 学習歴 4 年  |       |
|      | JNM31                | JNM32 |      | JNM39                 | JNM40 |

### 3.2 分析方法と発話機能

本稿における「依頼の断り」を、施（2005:45）を参考にし、「依頼を受けたあとから、その話題が終わるまでの、断る側がとる一連の言語行動」と定義する。

本研究では、「断り」を発話という単位ではなく、会話参加者同士の相互行為として捉える。したがって、分析には、会話分析の手法を用いる。まず、録音したロールプレイデータを、西阪・串田・熊谷（2008）のルールに基づいて文字化<sup>2</sup>し、分析資料とする。次に、会話参加者たちのすべての発話に発話機能を割り当てる。本稿では、被依頼者による【断りの事情説明】【断り】の発話機能が見られたデータを断りが達成されたデータとし、分析対象とする。各データで断りが達成されたかどうかの結果を表3に「◎」で示す。表3からわかるように、日本語母語場面では、J05 親と J05 疎と J06 親を除くすべての組で、断りが達成されたのは場面Ⅱのみだったため、本稿では場面Ⅱについてのみ言及する。また、条件をそろえるため、比較対象となる接触場面についても、場面Ⅱに絞って分析する<sup>3</sup>。

表3 ロールプレイ結果一覧

| 場面<br>組 | I |   | II |   | III |   | 場面<br>組 | I |   | II |   | III |   |
|---------|---|---|----|---|-----|---|---------|---|---|----|---|-----|---|
|         | 親 | 疎 | 親  | 疎 | 親   | 疎 |         | 親 | 疎 | 親  | 疎 | 親   | 疎 |
| J01     |   |   | ◎  | ◎ |     |   | G01     |   |   |    | ◎ |     |   |
| J02     |   |   | ◎  | ◎ |     |   | G02     |   |   | ◎  | ◎ | ◎   | ◎ |
| J03     |   |   | ◎  | ◎ |     |   | G03     |   |   | ◎  | ◎ |     |   |
| J04     |   |   | ◎  | ◎ |     |   | G04     |   |   |    |   |     | ◎ |
| J05     |   | ◎ | ◎  | ◎ | ◎   | ◎ | G05     |   |   | ◎  | ◎ | ◎   | ◎ |
| J06     |   |   |    | ◎ |     |   | G06     |   | ◎ |    |   |     |   |
| J07     |   |   | ◎  | ◎ |     |   | G07     |   |   |    | ◎ | ◎   | ◎ |
| J08     |   |   | ◎  | ◎ |     |   | G08     |   |   | ◎  | ◎ |     |   |

次に、断りの構造を分析するために、断りが達成されたデータにおける核となる連鎖組織の抽出を試みる。連鎖組織の抽出にあたって、依頼者の依頼に関する最初の発話を連鎖組織の初めの要素とし、被依頼者による断りを依頼者が承認した発話（【断りの承認】）を連鎖組織の最後の要素とする。連鎖組織の抽出後、日本語母語場面と接触場面で、連鎖組織にどのような異同が見られるのかを分析する。また、会話参加者同士の親疎関係による連鎖組織の異同や、言語形式、あるいはその音調については、必要に応じて分析の対象に含め、考察する。以下の表4で、分析で使用する発話機能の定義を示す。依頼の断りに関する先行研究には、談話完成テストにおいて意味公式を用いた分析が行われているものが多く、発話機能を用いたものは管見の限り見当たらなかった。そのため、主にザトラウスキー（1993）、猪崎（2000）、グエン（2014）の発話機能を参考にしたが、その分析に用いられている発話機能の一覧にない発話が今回のデータに見られたため、一部、Beebe et al.（1990）や鈴木（2011）、趙（2019,2021）の断りの意味公式を加えた。

表4 発話機能の枠組み

| 依頼者側      |                                             | 被依頼者側    |                                              |
|-----------|---------------------------------------------|----------|----------------------------------------------|
| 発話機能      | 定義                                          | 発話機能     | 定義                                           |
| 依頼の前置き    | これから依頼をするということを宣言する発話                       | 継続支持     | 相手が話を続けることを認める発話                             |
| 前提条件の確認要求 | 依頼をするうえで前提となる条件が相手に整っているか確認を求める発話           | 保留       | 相手の意図が理解できているが、自分の意見を提示せず、まだ相手に話を続けさせようとする発話 |
| 依頼の事情説明   | 依頼をするにあたっての事情を説明する発話                        | 前提条件の確認  | 依頼をするうえで前提となる条件について確認を求められ、確認する発話            |
| 依頼        | 依頼をする発話                                     | 詳細情報要求   | それまでの会話で相手から提供していない情報について確認を求める発話            |
| 詳細情報提供    | それまでの会話で自分自身が提供していない情報について相手に説明を求められて提供する発話 | 確認要求     | それまでの会話で相手からすでに提供された情報について再度確認を求める発話         |
| 依頼表明＝依頼   | 自分の目的が依頼であることを相手に確認（表明）する発話                 | 依頼意志確認要求 | 相手の目的が依頼であるのかどうかを確かめる発話                      |

|         |                                                         |         |                                                   |
|---------|---------------------------------------------------------|---------|---------------------------------------------------|
| 依頼のやり直し | なんらかの理由で依頼が達成できなかった際に、最初と同じように依頼をする発話                   | 断りの事情説明 | 依頼には添えない事情を説明する発話（＝暗示的断り）                         |
| 再依頼     | 一度相手に断られたあとに、もう一度依頼をする発話                                | 代案提示    | 自分が依頼を引き受ける以外で、相手の問題の解決策を提示する発話                   |
| 確認      | それまでの会話ですでに提供した情報について再度確認を求められ確認する発話                    | 確認＝断り   | 自分の発話が断りであることの確認を求められ確認する発話                       |
| 断りの受け止め | 相手の断りの意思に気づき、受け止めたことを示す発話。承認はしていない                      | 断り      | 依頼には添えないことを明示的に伝える発話。「難しい」や「厳しい」、謝罪を含む発話もこれに割り当てる |
| 事情理解    | 相手の事情を理解したことを表す発話                                       | 承諾      | 相手の依頼を一時的に承諾する発話                                  |
| 依頼の理由説明 | 依頼を承諾してもらうことを請めた後に、依頼をした理由について説明する発話。依頼の前に行う事情説明とは区別する。 |         |                                                   |
| 断りの確認要求 | 相手の発話の意図が断りであることの確認を求める発話                               |         |                                                   |
| 断りの承認   | 依頼に対する相手の断りを承認する発話                                      |         |                                                   |

#### 4. 結果と考察

本章では、分析の結果を示すとともに考察を行う。分析では、まず、三井（1997）や生天目ほか（2012）を参考に、【依頼の前置き】の有無により核となる連鎖組織を大別した。三井は、【前置き】があるものは、フレームを明示させて摩擦を軽減させるが、ないものは、フレームを明示させずに摩擦を回避する役割があると主張している。【依頼の前置き】がある場合にはそこから、ない場合には【依頼の事情説明】以降に始まる連鎖組織を分析した。その結果、被依頼者の【断り】の位置に、日本語母語場面と接触場面で異なる傾向が見られた。以降、本章では、被依頼者が行う【断り】の位置に焦点を置いて分析したうえで、日本語母語場面と接触場面のそれぞれで、核となる連鎖組織の抽出と比較を行う。

##### 4.1 日本語母語場面

本節では、日本語母語場面において【断り】が見られた位置について考察を行う。依頼者による【依頼】が行われると、被依頼者はまず【断りの事情説明】を行い、依頼者から【事情理解】を得てから【断り】を行う傾向が強く、15 データ中 J04 疎と J07 親を除く 13 データがこれに当てはまった。また、この傾向は、連鎖組織が依頼者による【依頼の前置き】から始まる場合にも、そうでない場合にも関係なく、見ることができた。以下、断片を見ながら説明する。

断片 1 は、JNM24 による【依頼の前置き】から始まっている。14 行目で JNM24 が【依頼】を行うと、その発話に重なりながら、JNM22 は 15 行目から 16 行目にかけて、【断りの事情説明】を行っている。「ちょっと予定がある」という抽象的な事情ではあったが、17 行目で JNM24 は【事情理解】をする。【事情理解】を受け取った JNM22 は 18 行目で、可能形の否定形によって【断り】を表明し、依頼を引き受ける状況にはないことを示してい



- 02JNF07: うんうん. 【継続支持】
- 03JNF09: 来週の.
- 04JNF07: うん.
- 05JNF09: なんだけど:, その日に:, ちょっと:, ヒゲダン<sup>4</sup>の:: ライブがあるんだよね.
- 06JNF07: え(.)すごいヒゲダン.
- 07JNF09: うんあたし大好きなの[ヒゲダン.
- 08JNF07: [うんうん[うん.
- 09JNF09: [うんだから:, (0.3)ちょっと行きたいんだけど:, (0.5)その日:, 間
- 10 違えて入れちゃったから:, (0.3)誰か代わりに行ってくれる人探してるんだけど:, (0.6)どうかな
- 【依頼】
- 11 (0.5)
- 12JNF07: そっか:来週の土曜日だよな?: 【確認要求】
- 13JNF09: そうだね.: 【確認】
- 14 (0.9)
- 15JNF07: うわ::: その日ちょうど私も: ちょっと(.)友達と(.)会う[約束しちゃってて:, 【断りの事情説明】
- 16JNF09: [あ(.)そうなんだ. 【事情理解】
- 17JNF07: でちょっと夜も,(.)もうなんかレストランみたいところに予約しちゃっ(0.3)[てて:,
- 18JNF09: [あ: そうなんだね.:
- 20JNF07:ほんとに:(.)ごめんその[日はちょっと厳しい[な: 【断り】
- 21JNF09: [hhh [そうだよな:(0.3)そっか:(0.7)そうだよな:(0.7)や
- 22 どうしようかな: と思って:, (0.6)考えてるんだけど:, 【断りの承認】

以上、二つの断片から、日本語母語場面において、【断り】が発話される位置について分析した。連鎖組織を【依頼の前置き】の有無により分けて分析したが、結果は、【依頼の前置き】の有無にかかわらず、【依頼】が行われた後に、【断りの事情説明】を行い、依頼者による【事情理解】が引き出してから【断り】が発話されていた。これは、施(2005)の結果と一致するものと捉えることができる。本データから抽出された、日本語母語場面における核となる連鎖組織は、以下の図1のようになる。

図1 連鎖組織<1>

|     |         |
|-----|---------|
| 01A | 依頼      |
| 02B | 断りの事情説明 |
| 03A | 事情理解    |
| 04B | 断り      |
| 05A | 断りの承認   |

## 4.2 接触場面

本節では、接触場面における【断り】の位置についての分析結果を述べる。日本語母語

場面と同じ位置で【断り】が発話され、核となる連鎖組織が同じであるデータは、10 データ中 5 データ見られた (G02 親、G03 親疎、G07 疎、G08 親)。一方、残る 5 データは、日本語母語場面とは異なる位置で【断り】が発話されており、核となる連鎖組織も異なっていた。その特徴は、【依頼】のあと、日本語母語場面で【断りの事情説明】があった位置に【断りの事情説明】がなく、【断り】があるということである。また、この特徴は、依頼者による【依頼の前置き】の有無に関係なく見られた。以下、【依頼の前置き】から始まる会話の断片と、【依頼の事情説明】から始まるものから具体的に説明をしていく。

断片 3 は、【依頼の前置き】から始まっている。JNM33 は、5 行目から 13 行目にかけて【依頼の事情説明】をし、15 行目から 16 行目にかけて【依頼】を行っている。【依頼の前置き】後に、段階的に【依頼の事情説明】を行うことで、聞き手の GNM05 は、どんな依頼を持ちかけられるかを徐々に把握していく様子が、「そう(.)そうか:」(6 行目)や「え:[::」(9 行目)、「え::」(11 行目)などから読み取れる。15 行目から 16 行目の JNM33 の【依頼】に対し、17 行目で GNM05 は「いや:それはちょっと:」と言って【断り】を示している。17 行目は発話冒頭にためらいを表す「いや:」が使用されていることに加え、「ちょっと」を強調するように全体に大きな抑揚があり、相手を非難、拒絶するような音調で発話されていたため、【断り】として機能していると判断した。GNM05 の【断り】に対し、JNM33 は 18 行目で笑いによって【断りの受け止め】を示す。しかし、【断りの受け止め】は【断りの承認】ではないため、必然的に GNM05 は【断りの事情説明】を期待されることとなり、19 行目から 28 行目にかけて行っている。それに対し、JNM33 が 29 行目で【事情理解】を示したところで、GNM05 は改めて 31 行目で謝罪表現で【断り】を表明する。続く 32 行目で、JNM33 が【断りの承認】をし、会話は終結に向かう。

《断片 3 : G05 親 II》

- 01JNM33 : あのださ; ちょっと:一つ(.)お[願いなだけでさ、 【依頼の前置き】  
 02GNM05 : [うん.  
 03 う:ん. 【継続支持】  
 04 (0.3)  
 05JNM33 : 来週の土曜日(.)あ:夜に:, アルバイト入れちゃったんだけど; 【依頼の事情説明】  
 06GNM05 : そう(.)そうか:. 【継続支持】  
 07JNM33 : あのだ:: (1.4) 実はその日の(.)どよ-来週の土曜日の夜:; (0.5) 好きな:; 歌手の(.)ライブ行く予定で:;  
 08 (0.3)  
 09GNM05 : え:[:::  
 10JNM33 : [ちょっと(.)あ:のだ::(.)だから:;  
 11GNM05 : え::  
 12 (1.3)

13JNM33 : あの間違えてシフト入れちゃったから;,  
14GNM05 : あ;  
15JNM33 : そう.(1.2)もし(.)よければ来週の:土曜日の夜空いてれば;,(0.4)シフト:変わってほしいな:って  
16 思うんだけど. 【依頼】  
17GNM05 : いや:それはちょっと:. 【断り】  
18JNM33 : hhh 【断りの受け止め】  
19GNM05 : hh(0.4)実は:::(0.3)あのね?(0.8)えっと::来週-来週の;,[土曜日ですが;], 【断りの事情説明】  
20JNM33 : [うん.  
21 うん.  
22 (0.5)  
23GNM05 : えっとほくわ-他の友達と;,  
24JNM33 : うん.  
25 (0.5)  
26GNM05 : だ-レストランに行く予定があって;,  
27JNM33 : あ  
28GNM05 : もう予約しちゃった(.)[からちょっと(.)と][: 【断りの事情説明】  
29JNM33 : [あ: [まじか. 【事情理解】  
30 (0.6)  
31GNM05 : う::ん(.)ごめん.hh 【断り】  
32JNM33:あ:(0.6)そっか:::(0.7)じゃちょっと別の:(0.7)人に:当たってみるわ. 【断りの承認】

断片 4 は、【依頼の前置き】がなく、JNF26 による【依頼の事情説明】から始まっている。1 行目の【依頼の事情説明】後、JNF26 は 5 行目から 7 行目にかけて【依頼】を行っている。それに対し GNF01 は、8 行目の沈黙や、9 行目の依頼内容を理解したというような発話と依頼内容の確認を求める発話により、依頼への返答を保留している。これは、依頼に対する非選好応答 (Pomerantz1984) と捉えることができる。さらに、GNF01 は 12 行目で JNF26 による確認を得ると発話を続けるが、14 行目の発話には音の引き伸ばしや言い淀み、沈黙といった非選好応答の特徴が見られ、断りの前兆として捉えることが可能である。続けて発話された「すいません」という謝罪表現は、実質的に【断り】として機能しているものと思われる。それに対し、JNF26 が【断りの受け止め】を行うことで GNF01 は【断りの事情説明】を期待され、0.5 秒の沈黙を置いてから、17 行目と 22 行目で【断りの事情説明】を行う。19 行目で JNF26 の【事情理解】を得たので、GNF01 は 24 行目で再度【断り】を行っている。その後、GNF01 が依頼を引き受けられない代わりに代案提示を行ったところで JNF26 は【断りの承認】をし、会話は終結に向かう。



34GNF01: それは(.)大丈夫ですか h

35 (0.6)

36JNF26: あ(1.0)GNF01 からも.;だれか:私のために誰か聞いてくれるってこと:?

37GNF01: あ(.)はい(.)[そうです.

38JNF26: [あ(.)すごいそれは助かる.:でも来週は:(0.5)そうなんだよね?(.)ディナー(.)だもん

39 ねレストラン[で. 【事情理解】

40GNF01: [はい.

41JNF26: そうだね.:確かに(.)それは:行けないわ:. 【断りの承認】

以上、二つの断片から、【依頼の前置き】の有無により、接触場面において【断り】が発話される位置について分析を行った。結果として、【依頼の前置き】の有無には関係なく、【断り】の位置は同じであった。すなわち、【依頼】がなされた後、被依頼者は【断りの事情説明】より前に【断り】を発話し、それに依頼者による【断りの受け止め】が後続し、被依頼者に【断りの事情説明】を期待する展開となる。【断りの事情説明】を聞いた依頼者が【事情理解】を示すと、被依頼者は改めて【断り】を行い、依頼者による【断りの承認】に行きつく。本データから抽出された、日本語母語場面とは異なる、接触場面で見られた核となる連鎖組織は、以下の図2のようになる。

図2 連鎖組織<2>

|     |         |
|-----|---------|
| 01A | 依頼      |
| 02B | 断り      |
| 03A | 断りの受け止め |
| 04B | 断りの事情説明 |
| 05A | 事情理解    |
| 06B | 断り      |
| 07A | 断りの承認   |

日本語母語場面では【断り】が【断りの事情説明】より後に行われる傾向が高い一方、接触場面では、【断りの事情説明】より先に行われるケースが母語場面と比較して多かった。その要因について、宮内(2003)の見解を援用して考察する。宮内(2003;176)では、依頼の方法や論証の様式について、ドイツ語を北米や西欧と同じ分類に位置づけ、「最初に要件もしくは結論を切り出し、その後で『誰が、何を、いかに』という5W+1Hの面から根拠づけを行うパターン」だと述べている。それに対して、日本語は最初に根拠や論拠、事情等を説明し、要件を最後に伝えるパターンであるとしている。このことから、今回のデータにおいて、被依頼者であるJNとGNで【断り】を発話する順序が異なっていたのは、母語における論証様式の違いに起因する可能性があると考えられる。しかし、接触場面における【断り】の位置が【断りの事情説明】より先に発話された要因には、もう一つの可能性が考えられる。それは、使用した日本語学習教材の影響によるものだ。調査協力者である学習者のほとんどは、初級レベルのとき、『みんなの日本語初級I・II』(スリーエーネ

ットワーク)を使用して日本語を学習していた<sup>5</sup>。当該教材における「断り」が導入されているページでは、断りの表現として「金曜日の晩はちょっと...。」(I:75)と「うーん。ちょっと仕事が...。」(II:19)があり、どちらも【断りの事情説明】より前に用いられている。つまり、この教材で学習した方法で断りを実践した結果として捉えることもできるかもしれない。連鎖組織<2>に示すように、今回のデータでのGNの発話は【断り】→【断りの事情説明】→【断り】という流れになっている。断ることで相手との関係性に摩擦が生じるのをできるだけ回避したり、生じる摩擦を軽減させるよう配慮したい場合、【断り】を二度行うことは、摩擦が生じるリスクをかえって高めてしまうと考ええる。

最後に、連鎖組織<1>と<2>が、データ全体でどのような分布になっているかを表5に示す。✓で示しているのは、<1>にも<2>にも分類できない連鎖組織の核をもつデータである。しかし、本稿では紙幅の関係上、これらのデータについて論じることはできない。表5に示すように、日本語母語場面は二つを除くすべてのデータで<1>の連鎖が見られた。その中で、親疎によって異なる連鎖が見られた組はJ04とJ07であったが、J04では親、J07では疎が<1>の連鎖、反対にJ04では疎、J07では親が<2>の連鎖が見られた。この結果のみでは、親疎関係による連鎖組織の異同を論じることは難しい。一方、接触場面では、親は1データが、疎は4データが<2>に分類され、親しい相手である方が<1>の連鎖となる傾向があるように見える。しかし、場面Ⅲを見ると、親ではすべてのデータが<2>に分類された。そのため、接触場面においても、親疎関係による連鎖組織への影響について、ここで論じることは難しい。

表5 連鎖組織の分布

| 場面<br>組 | I |     | II  |     | III |     | 場面<br>組 | I |   | II  |     | III |     |
|---------|---|-----|-----|-----|-----|-----|---------|---|---|-----|-----|-----|-----|
|         | 親 | 疎   | 親   | 疎   | 親   | 疎   |         | 親 | 疎 | 親   | 疎   | 親   | 疎   |
| J01     |   |     | <1> | <1> |     |     | G01     |   |   |     | <2> |     |     |
| J02     |   |     | <1> | <1> |     |     | G02     |   |   | <1> | <2> | <2> | ✓   |
| J03     |   |     | <1> | <1> |     |     | G03     |   |   | <1> | <1> |     |     |
| J04     |   |     | <1> | <2> |     |     | G04     |   |   |     |     |     | ✓   |
| J05     |   | <1> | <1> | <1> | ✓   | <1> | G05     |   |   | <2> | <2> | <2> | <2> |
| J06     |   |     |     | <1> |     |     | G06     |   | ✓ |     |     |     |     |
| J07     |   |     | <2> | <1> |     |     | G07     |   |   | <1> | <2> | <2> | <2> |
| J08     |   |     | <1> | <1> |     |     | G08     |   |   | <1> | <2> |     |     |

## 5. おわりに

本稿では、日本語母語場面と接触場面における依頼に対する断りの言語行動について、ロールプレイデータを用いて分析を行い、核となる連鎖組織の抽出と、その中における【断り】の位置について比較を行った。先行研究では、日本語母語話者同士の断り会話において、「断りの事情説明」の位置について述べられていたが、ドイツ語母語話者との日本語接触場面について述べられた研究はこれまでなかった。分析の結果、日本語母語場面では、被依頼者は【断りの事情説明】を行ってから【断り】を行っていた。これは、施

(2005)と一致する結果となった。一方、接触場面では、被依頼者が【断りの事情説明】より前に【断り】を行うデータが複数見られ、それらの連鎖組織は共通していた。また、【断りの事情説明】は、依頼者が【断りの受け止め】によって要求することで発話されていた。要因として、母語であるドイツ語の論証様式の影響、及び日本語学習教材で教えられている会話展開の影響の可能性を挙げた。今後は、言語形式や音調などにも分析の範囲を広げ、また今回は詳細に扱えなかった親疎関係による異同について分析を進めていきたい。

## 注

1 場面設定に際して、ドイツ語母語話者3名に、ドイツ語社会で日常的に遭遇する依頼場面について、その負担度の高低とともにインタビューを行った。その中から、日本語社会でも遭遇し、また負担度が高いと筆者が判断した場面を選び、設定した。また、ロールカードにはドイツ語訳も付しており、訳はドイツ語母語話者にチェックしてもらっている。

2 トランスクリプトに用いた記号

[ 複数の参加者の発する音声が重なり始めている時点は、( [ ) によって示される。  
(m. n) 音声が途絶えている状態があるときは、その秒数がほぼ0.2秒ごとに( )内に示される。  
(.) 0.2秒以下の短い間合いは、(.)という記号によって示される。  
言葉:: 直前の音が延ばされていることは、コロンで示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。  
言葉 音の強さは下線によって示される。  
言- 言葉が不完全なまま途切れていることは、ハイフンで示される。  
h 呼吸音や笑いを表すのに用いられる。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。  
. , ? 語尾の音が下がって区切りがついたことはピリオド(.)で示される。音が少し下がって弾みが付いていることはカンマ(,)で示される。語尾の音が上がっていることは疑問符(?)で示される。

3 本稿では、紙幅の都合上、親疎関係による異同を詳細に考察しない。

4 Official 髭男dism(オフィシャルヒゲダンディズム)というバンドを指している。

5 GNには、ロールプレイの実施前後に、日本語学習歴や、日本語レベル、性別のほかに、使用教材や滞在歴、家庭で話されている言語についての質問にも答えてもらっている。

## 参考文献

猪崎保子(2000)「接触場面における『依頼』のストラテジー—日本人とフランス人日本語学習者の場合—」『世界の日本語教育』10, pp.129-145

任炫樹(2004)「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6(2), pp.27-43

元智恩(2005)『日韓の断りの言語行動の対照研究:ポライトネスの観点から』筑波大学博士論文

尾崎喜光(2006)「依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版, pp.89-114

グエン・ティ・ニュー・イー(2014)「依頼発話における談話構造に関する日越対照研究:依頼

- 内容の負担度に着目して」『日本語・日本文化研究』24, pp.93-103
- ザトラウスキー・ポリー (1993)『日本語の談話の構造』くろしお出版
- 施信余 (2005)「依頼に対する『断り』の言語行動について—日本人と台湾人の大学生の比較—」  
『早稲田大学日本語教育研究』6, pp.45-61
- 鈴木恵理子 (2011)『中国人日本語学習者の断りのストラテジー—ポライトネス理論の視点から—』東北大学大学院国際文化研究科博士論文
- 武田加奈子 (2006)『接触場面における勧誘談話管理』千葉大学社会文化学研究科博士論文
- 趙丹楠 (2019)「中国語母語話者と日本語母語話者による依頼表現にみられる意味公式の対照研究」『外国語学研究科』21, pp.21-30
- (2021)「依頼発話行為に関する日中対象研究—意味公式から見る依頼負担度の影響を中心に—」『外国語学研究』23, pp.57-64
- 生天目知美・劉雅静・大和啓子 (2012)「日中韓の友人会話における依頼の談話展開」『筑波応用言語学研究』19, pp.15-29
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008)「特集：『相互行為における言語使用：会話データを用いた研究』について」『社会言語科学』10(2), pp.13-15
- ネウストプニー, J.V. (1981)「外国人の日本語の実態(1)外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45 pp.30-40
- 堀江インカピロム・プリヤー (1995)「依頼表現の対照研究——タイ語の依頼表現」『日本語学』14(11), pp.76-83
- 三井久美子 (1997)『依頼』のフレーム明示性について」『日本語・日本文化研究』7, pp.235-245
- 宮内敬太郎 (2003)「異文化コミュニケーションとドイツ語談話分析」『2003 年度コミュニティ福祉学部研究センター研究会報告』pp.169-183
- 村田裕美子・李在鎬 (2017)「ドイツ語話者の話し言葉コーパスの開発」『Schriften der Gesellschaft für Japanforschung Band2』pp.1-19
- 吉井千明 (2009)「断り表現—親しさの度合いに注目して—」東京女子大学言語文化研究  
『Studies in Language and Culture』18, pp.70-86
- Beebe, L.M., Takahashi, T.& Uliss-Weltz, R (1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In R.C. Scarcella, E. Anderson & S.C. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*. 55-73 New York: Newbury House
- Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.57-101

#### 引用教材一覧

- 『みんなの日本語初級I第2版：本冊』(2012) スリーエーネットワーク
- 『みんなの日本語初級II第2版：本冊』(2013) スリーエーネットワーク